

コミュニケーション能力を育成するための授業づくり

～子供の気付きや困り感に着目し、会話を広げる子供の育成を目指して～

横山由佳¹・足立和美²

¹鳥取大学附属小学校

²鳥取大学名誉教授

平成29年に告示された学習指導要領解説外国語活動・外国語編において、外国語でのコミュニケーション能力の育成がより明確に記されている。そこで、本研究では、コミュニケーション能力を育成するための授業づくりとして、方略的能力を向上させることを目的に授業実践を行った。また、簡単な日英語の比較の視点などを通して、言葉に対する興味関心を高め、ひいては英語（言葉）を大切にしようとする態度の養成のきっかけとなるよう工夫を行いながら実践をしてきた。対話を続ける目的の方略的能力の向上は、既習表現やよく使われる慣用表現、繰返しや聞返しの表現、ジェスチャーなどの非言語表現の力の育成を図ることで得られると考え実践した。その結果、様々な表現を使って何とか伝え合おうとする子供の姿があり、対話を続けることで英語でのやりとりを楽しむことができる子供も増え、方略的能力の向上が見られた。そして、方略的能力の向上が、コミュニケーションの広がりにつながっていると考えられた。

キーワード：コミュニケーション、方略的能力

1 はじめに

1.1 外国語科の未来へつなぐ授業づくりの視点

1.1.1 外国語科特有の見方・考え方

小学校学習指導要領解説外国語活動・外国語編（2018, p.11）において位置付けされた「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」とは、外国語によるコミュニケーションの中で、どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのかという、物事を捉える視点や考え方である。そして、「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」であると考えられる。また、コミュニケーションで用いられる外国語（英語という言葉）については、その音声や書き言葉の側面について興味関心をもたせるように指導したり、さらに言葉を大切に扱うという態度を養成したりすることも重要であると考えられる（足立, 2003）。そこで本校では、相手の発する外国語を注意深く聞いて何とか相手の思いを理解しようとしたり、もっている知識を総動員して相手に外国語で自分の思いを伝えようとしたりすること、言葉そのものを大切にしたい授業づくりを目指している。

1.1.2 外国語科の提案する学びのプロセス

①目的・相手意識を大切にしたいコミュニケーション活動

外国語を知識として理解・習得することはもちろんのこと、それらを相手の様子やそのときの状況によって、どのように使っていけばよいのかを思考しながら実際のコミュニケーションの中で使っていくことでコミュニケーション能力が高まっていくのではないかと考えた。そこで、学習中のコミュニケーションを図る活動において、目的や相手を設定し、子供たち

が何のためにその活動をするのかという動機や、やってみたいという意欲をもって行うことができるようにする。そうすることで、実際のコミュニケーション場面で力を付けていく授業になると考える。また、子供たちの気付きや困り感を共有し、コミュニケーションを続ける工夫を考えるようにさせることで、他者に配慮した上で、自ら考え、自らの言葉や表現でコミュニケーションを行えるようにする。

②全学年共通したウォーミングアップ

ウォーミングアップシートや英語教材「英会話たいそう」（株式会社 mpi 松香フォニックス発行）を使用し、日常の簡単な表現に慣れ親しませ、自然なコミュニケーションの基礎を養う機会を設定する。また、日本語と英語の音声の特徴や違いに留意し学習していく。高学年は、スモールトークなどで教師や友達同士であいさつ以外の簡単な会話表現のやりとりを発展的に扱っていく。また、読むことや書くことも意識させることで、語彙を増やしたり、文構造を意識したりできるようにする。

③やり取りの中で意識させたいコミュニケーションポイント

本校では、非言語での能力向上を目指し、小学校6年間の発達段階に応じて、子供に意識させたいコミュニケーションポイントを活用している（図1）。低・中・高学年と意識させたいコミュニケーションポイントを増やしていき、それをういた活動を重ねることで、コミュニケーションを図る素地や基礎を育てていく。このような活動を通して、他者とのコミュニケーションを図るためには、非言語的要素も重要となってくることに子供たち自身が気付くことができるようにする。6年生では、対話の充実を図るために、特にジェスチャーと反応を大切に指導していく。



図1 コミュニケーションポイント

1.2 外国語科における「未来へつなぐ」とは

低学年では、外国語活動の導入として音声や基本的な表現に慣れ親しみながら、体験的に理解を深め、コミュニケーションを図ろうとする態度を育成していく。また中学年では、「聞くこと」「話すこと」を中心とした外国語活動を通して、言語や文化に対する体験的な理解、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度、外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しみの3つを指したコミュニケーション能力の「素地」となる資質・能力を育成していく。さらに高学年では、対話を続けるための基本的な表現として意識付けるために、「読むこと」「書くこと」を少しずつ加えた単元構成を工夫している。これからのグローバル社会を生き抜いていくためには、子供の頃から幅広いものの考え方や異文化にふれ、国際理解や多文化共生の意識をもつ人材を育成することが求められている。異なる言語や文化を理解したり、他者と積極的にコミュニケーションを図ったりすることが、これからの社会に生きる子供たちにとっては、重要なことである。

2 問題の所在

小学校学習指導要領解説外国語活動・外国語編（2018, p.7）では、平成23年度から小学校の高学年において外国語活動が導入され、その充実により、子供の高い学習意欲、中学校の英語教育に対する積極性の向上といった成果が認められている。一方、次の3点が課題と

コミュニケーション能力を育成するための授業づくり～子供の気付きや困り感に着目し、会話を広げる子供の育成を目指して～

なっていることが指摘されている。

- (i) 音声中心で学んだことが中学校段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていない。
- (ii) 日本語と英語の音声の違いや英語の発音と綴りの関係、文構造の学習において課題がある。
- (iii) 高学年は子供の抽象的な思考力が高まる段階であり、より体系的な学習が求められる。

こうした成果と課題を踏まえ、同解説では、小学校中学年から外国語活動を導入している。その中で、音声面を中心とした活動を通じて外国語に慣れ親しみ、外国語を用いたコミュニケーションを図る素地となる資質・能力を育成していく。その上で、高学年において、「読むこと」、「書くこと」を加えた教科として外国語科を導入し、コミュニケーションの基礎となる資質・能力を育成していく。それと同時に、中学校への接続を図ることを重視することになった。中学年では、身近で簡単な事柄について音声で十分にコミュニケーションを図り、素地となる資質・能力を育成していく。さらに、高学年では、話題を広げてコミュニケーションを図ることで基礎の力につなげていく。従来の学習指導要領においても、外国語を用いてコミュニケーションできることが最終的な目標とされてきたが、現行の学習指導要領においては、それがより明確に記されている。

そのため、昨年度の研究において、「目的・相手意識」、「全学年共通したウォーミングアップ」、「コミュニケーションポイントを意識したコミュニケーション活動」に着目し、授業の中でそのプロセスをたどっていくことで、コミュニケーション能力の育成を図ってきた。その結果、コミュニケーション活動への意欲的な参加や他者への配慮などの向上が見られた。しかし、一方で、決められたやり取りにとどまり、自ら考え表現しようとする力や、困った場合にどのようにコミュニケーションを進めていくかを考える力の育成が不十分だったと言える。

Canale (1983) は、コミュニケーション能力を高めるために、次の4点を挙げている。

- (1) 文法的能力：文法的に正しい文を用いる力
- (2) 談話能力：意味のある談話（会話や発表）や文脈を理解し、談話を作る力
- (3) 社会言語学的能力：社会的な文脈を理解・判断し、状況や相手に合った表現をする力
- (4) 方略的能力：目的達成のために対処する力

そして、大城 (2008) は、これら4つの能力と日本の学校の教育段階の関係を、コミュニケーション能力の視点から見た日本の英語教育のモデルとして表している (図2)。これによると、方略的能力は、特に、語彙や文法知識の少ない小学校段階の子供たちにとって大きな意味をもっていると言える。この時期の子供たちのコミュニケーション能力の育成には、言いたいことが伝わらないときに、もう一度言ったり、言い換えたり、ジェスチャーを使ったりするなどの工夫をする方略的能力の育成が大事になると言える。

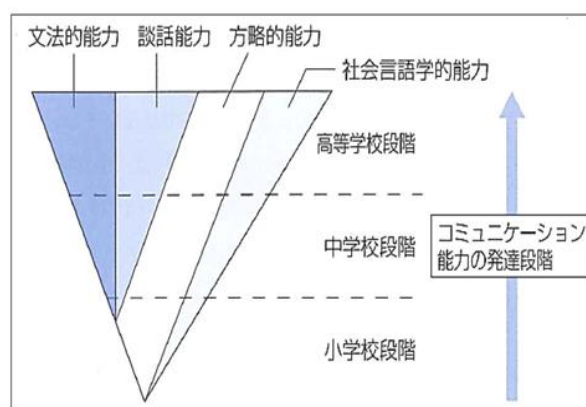


図2 日本の英語教育モデル

与えられた表現のやり取りだけでなく、小学校の高学年において、話題を広げてコミュニケーションを図る基礎の力を養うためにも、自ら考え、自らの言葉や表現でコミュニケーションを行う必要があると考える。さらに前述したように、「外国語に興味関心をもたせ、言葉を大切に扱う態度」を加えることによって、小学校の外国語・外国語活動を「スキル+国際理解教育」の両面を育てていく教育活動にすることが期待される (cf. 足立 2019)。

3 研究の目的と方法

3.1 研究の目的

今年度は、コミュニケーションに使える表現として、既習表現やよく使われる慣用表現、繰返しや聞返しの表現、ジェスチャーなどの非言語表現の力の育成を図ることで、何とかして伝え合おうとする方略的能力の向上が見られるか検証していく。さらに、英語と日本語の音変化に着目させるような工夫や、a と an の使い分けに気付かせるような指摘を加えた実践を重ねることが、言葉に対する興味関心を高めることにつながるかも見取っていく。

3.2 研究の方法

方略的能力の向上を育成するための手立てとして、2つ提案する。1つ目は、既習表現やよく使われる慣用表現、繰返しや聞返しの表現を活用する力の育成を図ることである。担任とALTによるデモンストレーションから、対話が続けるための表現を考えさせ、自分たちのコミュニケーション活動に生かしていく。対話を考えるときに、既習表現や慣用表現を思い出せるよう提示する。そのほかにも、感想などの相づちを打ったり、相手が言った言葉を繰返したりする方法も活用させる。また、相手が言っていることが分からなかった場合に聞き返す力も付けていく。2つ目は、ジェスチャーや絵で表したり、英単語や擬音を使ったりするなどの工夫を活用する力の育成を図ることである。伝えたい英語表現が分からないときには、自分に表現できる方法を使って何とか伝える工夫を考えさせる。また、英語表現と合わせて活用することで、より伝わるように表現の工夫を考えさせる。

これらの手立てを繰返し行っていくことで、方略的能力の向上をねらう。検証方法としては、授業の様子、子供の振返り、アンケートなどをもとに検証する。学習する表現を使ったコミュニケーション活動を行うとき、慣用表現、繰返し、ジェスチャーなどの方法を活用して対話が続けることができるかを見取っていく。

4 総合考察

4.1 結果

4.1.1 検証授業（1）第6学年 「What do you want to watch?」の実践（7月）

本時は、見たいオリンピック競技を尋ね合うというコミュニケーション活動でのやり取りの続きを考え、実際に自分たちで選んだり考えたりしながらコミュニケーションを行った。本単元で扱う表現に慣れ親しむだけでなく、既習表現やよく使われる慣用表現を活用したり、繰返しやジェスチャーを駆使したりして、他者に配慮し、話題を広げていくことをねらい実践した。

まず、HRTとALTが本単元で扱う表現を使い、「オリンピック競技で何が見たいか。」と尋ね、「ラグビーが見たい。」と答えて終わるという質問をして答えるだけのやり取りを見せた。

「ラグビーが見たい。」と答えたにもかかわらず、何も反応しないという違和感のある対話を見せることで、これらの表現に続く対話をみんなで考える活動の必要性をもたせた。みんなで考えることで、Why?, How about you?, That's nice.など、やり取りを続けるときにどんな表現を使えばよいか具体的に提示することができた。そうすることで、子供たちは、実際にペアでコミュニケーション活動を行うときに、自分に使いそうな表現を選び、対話が続けようとしていた。

コミュニケーション能力を育成するための授業づくり～子供の気付きや困り感に着目し、会話を広げる子供の育成を目指して～

対話の流れや対話を続けるポイントを書いたワークシートを活用したことも、対話を続けることに有効だった(図3)。1回目、2回目、3回目と相手を変えて対話を行ったあと、振返りをすることで、使えた表現や回数が増えるのが目に見えて分かり、子供たちの意欲につながった。

相手を大切にして、対話を続けよう!!

		NAME()	評価	1回目	2回目	3回目
対話のはじまり	あいさつ Hello./ How are you?/ I'm good.など		できたら○			
くり返し	相手の話した内容の中心となる語や文をくり返して確かめる。 相手: I went to Tokyo. 自分: You went to Tokyo.		使ったら○			
聞き返し	相手の話した内容が聞き取れなかった場合に再度の発話をうながす。 One more time, please. / Pardon?		使ったら○ 必要なし/			
慣用表現	相手の話した内容に感想を言ったり、分かったことを伝えたりする きまった表現 言葉が出てくるまでのつなぎの言葉 That's nice. / I see. / Me too. / How about you. / Really? Well. / Let's see. など		使えた回数			
学習した表現	今まで習った表現を使って質問をする。 Do you like~? Can you ~? など		使えた回数			
ジェスチャーなど	言い方が分からないときはジェスチャーや絵、単語、音を使う		使ったら○			
対話のおわり	あいさつ See you. / Bye. など		できたら○			

図3 対話を助けるワークシート

4.1.2 検証授業(2) 第6学年 「What do you want to be?」の実践(10月)

本時は、将来の夢を尋ね合うというコミュニケーション活動を行う中で、対話の続きを自分で考えながらコミュニケーションを行った。検証授業(1)同様、様々な方略を使い対話を続けられるよう実践した。検証授業(1)では、本単元で扱う表現に続く対話をみんなで考えたが、検証授業(2)では、提示した英語のやり取りの中から見付ける活動を行った。検証授業(1)後も、既習表現を使って質問をしたり、相づちを打ったりするコミュニケーション活動を続けてきたが、同じ表現に終始する傾向にあった。そこで、教科書のリスニング教材の対話の中に、聞き逃しているが使える表現があるため、子供たちの語彙を増やすためにも、本単元ではこのような提示をした。子供たちは、自分の今ある知識だけでなく、教材の英文を目で読みながらやり取りをじっくりと聞くことで、今まで気付かなかった表現(Well, Good luck.など)にも注目することができ、自分たちの対話に生かすことができた。

しかし、対話を続けるための表現を考える活動を中心に行なったため、英語での対話のやり取りに注目が集まり、言葉を補うジェスチャーや、相手に配慮した表情や態度がコミュニケーションの中であまり見られないという課題が明らかになった。

4.2 結果の分析と考察

検証授業を通して、様々な表現を使って何とか伝え合おうとする子供の姿があった。そして、学習後の振返りの内容からも、対話を続けることで英語でのやりとりを楽しむことができる子供が増えていることが分かった。また、低学年から積み上げてきているコミュニケーションポイントの中でも、特にアイコンタクトや笑顔に関しては多くの子供が大切に学習を進めることができた(図4)。このように、子供たちは、既習表現やよく使われる慣用表現、繰返しや聞き返しの表現を自分たちの対話の中に取り入れることができることに気付き、繰返しそのような場面を設定し実際に使っていくことで、以前に比べ、対話を続けようとするようになってきた。このことから、対話を続けていくという視点での方略的能力の向上は見られたと言えるだろう。



図4 やり取りの様子

しかし、一方で、対話は続いているように見えるが、なかなか自信がもてず相手を意識したコミュニケーションが行えない子供もいたという課題も見えてきた。これは、対話を続けることに重点を置いたことで、自分の考えの大切などを強くはっきり発音したり、気持ちを含めた言い方を工夫したりするなどの聞き手に対する配慮に欠けてしまったことが原因ではないかと考えられる。また、言葉での表現で対話を続けることを意識させるあまり、本単元で扱う表現を使って何をするかという本来の目的が薄れてしまったことで、自分のことを伝えたい、相手のことを聞きたいというコミュニケーションにおいて基本的なことへの欲求が高まりにくかった子供がいたのではないとも言える。やはり、主体的なコミュニケーションでは、聞き手の理解の状況を確認しながら話そうとする態度、相手の発話に反応しながら聞き続けようとする態度などが大切である。

検証（2）の授業の中で、**What do you want to watch?**という文を練習する機会が多くあった。その際、**want**の語末の**t**と、後続する**to**の**t**とが連結して、音声上/**t**/は一回しか発音されないのが自然であることを、ALTの発音を確認することで指導した。次いで、日本語でも「何してる」（鳥取地方では「何しとる」）が「何しよう」と音変化が起こることにも触れた。すると子供たちの間に一瞬沈黙が訪れた。おそらくこの短い瞬間、子供たちは日本語と英語に同じように起こる言葉の変化に改めて気付いたのではないかと判断される。

このような経験の積み重ねが、やがて言葉に対するより大きな興味関心へと繋がる契機となるのではないかと実感した。さらに、単数可算名詞の前につく不定冠詞**a**と**an**について尋ねると、多くの子供がその違いについて気が付いた反応を示した。小学校段階でのこのような気付きがやがて、中学校での英語教育でプラスとして働くことが期待される。このことは、小中の連携は知識やスキル面での連携だけに制限されないことを示唆していると言えよう。

4.3 研究のまとめ

4.3.1 結論

本研究では、コミュニケーションに使える表現として、既習表現やよく使われる慣用表現、繰返しや聞返しの表現、ジェスチャーなどの非言語表現の力の育成を図ることで、方略的能力の向上が見られるか検証した。結果として、子供たちは、対話を続けるための表現を考え増やしていくことで、対話を続けるという目的を達成するための方略的能力の向上は見られたと言える。

4.3.2 課題

言葉での対話を続けることに重点を置くことになり、相手を意識したコミュニケーションにならない子供が見られた。また、本来の目的が薄れてしまったことで、自分のことを伝えたい、相手のことを聞きたいというコミュニケーションにおいて基本的なことへの欲求が高まりにくかった。

またこのような授業の継続が、どのように英語（言葉）を大切にしようとする態度の養成となっていくのかに関するより詳細な検証も、今後の課題として残った。

4.3.3 今後の展望

小学校高学年で外国語が教科となり、知識の部分だけに意識が向きがちである。もちろん知識として習得することも大切なことではあるが、本研究の課題にもなったように、コミュニケーションで大切なのは相手への配慮である。また、言葉を学ぶことにおいて、その言葉に興味をもつこと、また、その言葉を通じてその言語を使う文化をリスペクトすることが本来大事なのである（cf. 足立 2019）。言葉は伝えるための道具であるが、その言葉を大切に丁寧に使っていくことが、相手への配慮のあるコミュニケーションへつながり、主体的なコミュニケーションと言えるだろう。そこで、他者への配慮あるコミュニケーション能力の向上についての取組を検討していきたい。

コミュニケーション能力を育成するための授業づくり～子供の気付きや困り感に着目し、会話を広げる子供の育成を目指して～

【文献】

足立和美（2003）「国際理解教育と英語教育—知・考・感の三層構造の観点から」鳥取大学教育地域科学部紀要 vol.4 no.3. pp21 - 44

足立和美（2019）「言葉のリスペクト教育を」日本海新聞 2019.6.3.

Canale,M.(1983).From communicative competence to communicative language pedagogy.

In J. C. Richards and R. W. Schmidt, *Language and communication*.

松川禮子・大城賢（2008）小学校外国語活動 実践マニュアル 旺文社

文部科学省（2018）小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編 開隆堂出版社